

# 留学生センター「総合日本語コース」の日本語教育 —チームティーチングによるコース運営を中心として—<sup>1</sup>

峯 正志\*・長野 ゆり\*

## 要 約

金沢大学留学生センターの提供する「総合日本語コース」は、様々な異なるニーズを持つ留学生の混在する日本語プログラムである。このようなプログラムで留学生個人のニーズを的確に掴んで問題点を解決するためには、複数の教員が協力して指導するチームティーチングが有効である。しかしその円滑な運営には担当教員間の緊密なコミュニケーションが必要不可欠である。本稿では本プログラムの運営体制の概要を述べて、どのようにしてそれを実現しているのか、そしてそれにはどのような問題点が存在するのかを述べる。

## 1. はじめに

金沢大学留学生センターが全学の留学生に対して行っている日本語プログラム「金沢大学総合日本語コース」の大きな特色は、日本語に対して異なるニーズを持つ学生が一緒に同じクラスで授業を受けているという点であろう。このプログラムは、従来の日本語補講の規模を単に大きくしただけのものではなく、日本語の単位を必要とする様々なプログラムの学生も一緒に学んでいる。つまり、日常の生活のための日本語を学びたい学生以外にも、日本語クラスの受講がプログラムの修了の要件となっている学生や、日本語や日本文化が専門で高度の日本語能力を身につけたい学生も、同じ内容の日本語の授業を受けているのである。

日本語教育では、学習者の持つニーズに合わせて授業を計画し行うのが普通であり、本プログラムのようなやり方は本来はあまり適切なものではないのかもしれない。しかしこの大学も現在はプログラムの効率化が求められており、目的に合わせた様々

---

1 本稿は、平成21年9月25日に行われた2009年度第4回金沢大学外国語教育研究センター研究会において、同じ題目で発表した内容に加筆したものである。

なプログラムを同時に開講するような贅沢なことは難しくなっており、本プログラムの様な運営の仕方にも存在理由があると確信する。<sup>2</sup>

様々なニーズを持つ学習者の混在するクラスで、どのように彼らのニーズに合った授業を行うのか。彼らの問題点を的確に掴んで、どのように解決するのか。その一つの鍵は、教師の側の連携の強化にあると考える。本プログラムでは、日本語の通常クラスは、複数の教師のチームティーチングによって行われているが<sup>3</sup>、教師間の連絡を密にすることで学習者の個々のニーズ、問題点を的確に掴み、問題を解決しようと試みている。そこで、本報告では、総合日本語コースのチームティーチングによるコース運営に焦点を当て、どのようなやり方で学習者のケアを行っているのかを報告する。

まず、次章でコースの概要を紹介し、その上で、コース運営の特徴を述べる。その後、この運営法の長所・短所を考察し、最後に今後の展望について述べたいと思う。

## 2. 金沢大学総合日本語コースの概要<sup>3</sup>

### 2. 1 コースの目的

このコースの目的は、大学・大学院での学習・研究活動の基盤となる実践的日本語力を養うことである。

### 2. 2 対象学生

金沢大学に在籍する留学生で日本語を母語としない者が対象である<sup>4</sup>。この留学生の中には、通常金沢大学の学部生、大学院生、研究生等の他、「日本語研修コース」「日本語/日本文化研修コース」「金沢大学短期留学プログラム (KUSEP)」「日韓理工系学部留学生コース」のような、日本語クラスの受講を必修としているプログラム生も含まれている。このため、様々な背景の学生が混在している。特にその中で、彼らの日本語学習に対するニーズの違いが多様であることは上で述べたように、このコースの大きな特徴である。

---

2 本センターは、平成15年度に外部評価を受けたが、その際、この点について、このようなコースを「作らざるを得ないだろうという議論」が広がっており、「非常に関心を持って見て」いるという評価委員の意見があった。これについては『金沢大学留学生センター外部評価報告書2004』（2004）p.50を参照のこと。

3 資料としては多少古くなったが、総合日本語コースの全体像については『金沢大学留学生センター自己点検評価』（2003）を参照のこと。

4 ただし、クラスに人数の余裕があるときは、客員研究員や外国人教職員もクラスに受け入れることがある。

## 2. 3 カリキュラム

総合日本語コースの大きな特徴として次の2点が挙げられる。

1) 通常クラス、漢字クラス、技能別クラスの3種類のクラスがある。

通常クラスは、「話す・聞く・読む・書く」という4技能を総合的に伸ばすクラスであるのに対し、漢字クラスは漢字の読み・書きを、技能別クラスは4技能を個別に伸ばすクラスである。技能別クラスは、現在「初級読解」「中級読解」「上級読解」「作文」「聴解」「口頭発表」「レポート作成」「コンピューターを用いた論文作成」「討論」「日本事情」の10クラスがある。

2) 7レベルのクラスがある。

初級から上級まで、7つのレベルのクラスがある(初級2クラス; 初中級1クラス; 中級2クラス; 上級2クラス)。平成10年に総合日本語コースが開始されたときは、初中級を除く6クラスであったが、初級から中級へのスムーズな橋渡しを目的に初中級クラスを新設した(平成12年度後期から)。これは、非漢字圏からの脱落者・不合格者を減らそうとするための措置であった<sup>5</sup>。

授業の回数は、通常クラスでは初級I(Aクラス)が週5時間、初級II(Bクラス)が週4回、それ以外(C1クラス~Fクラス)は週3回。ゼロ初級に関しては、週10回の速習コース(AAクラス)も存在する。漢字クラス、技能別クラス<sup>6</sup>は、すべて週1回である。

なお、この二つの特徴は、日本語必修のプログラム生を総合日本語コースに受け入れたことと関係がある。つまり、従来の日本語補講クラスでは、授業について行けない学生は中途放棄となり、また次の学期にトライするということが多かったが、必修となると、どうしても脱落学生を出さないことが必要となる。そのため、レベルを多くして、受講学生のレベルの均一化を図り、脱落者を少なくしようとしたのである。3種類のクラスの存在については、日本語必修の学生は週5コマ授業を取ることが必須となるので、どのレベルについても5コマの授業を用意しなければならなくなった。そこで、中級、上級の学生に、漢字クラス1コマ、技能別クラスを1コマ取らせるこ

---

5 中級I(Cクラス)を初中級クラス(C1クラス)と中級I(C2クラス)の二つに分けたわけである。総合日本語コースでは飛び級は通常は認めていないが、BクラスからC2へ進むことだけは正式な進級のルートとして認めている。ただし実際には、漢字圏の少数の学習者を除いて、ほとんどの学生はC1クラスへ進級する。(詳細については、長野・笹原・寺下(2003)を参照のこと。)

6 技能別クラスの一部は、共通教育の言語科目「日本語B」としても開講している。

とで、5コマを確保したわけである<sup>7</sup>。

以上は、角間キャンパスで開講されているクラスである。これ以外に、宝町キャンパスでは、「医学部補講」と呼ばれる授業も行われている。これは、医学研究科の学生の要請により開講されたもので、初級と中級の2レベルでそれぞれ週2回授業を行っている<sup>8</sup>。

### 3. コース運営 — チームティーチングを中心として —

#### 3. 1 チームティーチングとは？

「通常クラス」では、各クラス3～4名の教師から成るチームで授業を行っている。これは、もちろん1回の授業を複数の教師が担当するという意味ではなく、例えば週3回の授業なら、その3回をそれぞれ別の教師が担当するという意味である。教師は進度表（日程表）に従って授業を行い、自分が行った授業の引き継ぎをしっかりと、次の担当者の授業にうまくつなげなければならない。従って、担当者は自分が行う授業についてだけでなく、チームの他のメンバーが行う授業についても常に把握して、お互いに密接に連絡を取り合わなければならない。引き継ぎには、主に電子メールを用いる。緊急の場合には電話連絡もある。

#### 3. 2 チームティーチングのメリット

このように、チームティーチングをうまく機能させるには、教師間の十分なコミュニケーションが求められる。例えば一人の担当者が週3回のクラスをすべて担当した場合は、このような教師間のコミュニケーションは必要ないので、相当手間が省けることになる。にもかかわらず総合日本語コースでこのような手間のかかる方式を採用している理由としては、以下のようなものがある。

- 1) 授業に対する手抜きが防止される
- 2) シラバス・試験問題・副教材など：複数の教員の目が入るため、間違いが少なく質のいいものができる
- 3) 授業の進め方・問題への対処など：複数の教員の意見・知恵が結集される

---

7 この措置は結果的に、日本語が必修でない他の学生にとっても恩恵を与えることになった。週1回のクラスができることによって、忙しい学生にも日本語クラスを受けられる可能性が出来たからである。

8 2レベルしかないため、クラスでの学生のレベルの違いが大きく、複式授業になることが多い。その場合は、国際学類の先生方の協力を得て、教育学部や国際学類の日本語教育主専攻の学生にアシスタントとして手伝って貰っている。

- 4) 評価の公正さが保たれる
- 5) 学生は個性の異なる教員に触れる機会を与えられる<sup>9</sup>
- 6) 教員は切磋琢磨の機会を与えられる
- 7) 教員は共にコースを運営しているという連帯感を持つことができる

### 3. 3 具体的業務

最初に、コース全体を誰がどのように運営しているかの概要を示そう。まず、コース全体の統括者として、専任教員の務める「コース責任者」がある。これは総合日本語コース全体の方針を決める最終責任者である。この下に、各クラスをまとめる「レベル責任者（またはクラス責任者）」が置かれる。これは非常勤講師の中からコース責任者が指名する。このレベル責任者が、各クラスのまとめ役となつて、各クラスの方針を決めたり、コース責任者との連絡役を務めたりするのである。

それでは以下に、担当教師のやるべき具体的業務を挙げてみる。

#### 3. 3. 1 チーム全体としての業務

- ①毎回の授業の引き継ぎ
- ②学期初めのミーティング（進度表の作成、授業の進め方の方針などの決定、初日配付物の準備など
- ③定期試験（中間・期末）前後のミーティング（試験問題の作成、採点・評価）
- ④（必要に応じて）小テスト、副教材などの作成、修正
- ⑤円滑な授業運営のための種々の対策の実施（学生のレベル移動に関する判断<sup>10</sup>、進度表の見直し、遅れがちな学生の手当てなど、諸問題への対処）

#### 3. 3. 2 「レベル責任者」の業務

各チームに1名、「レベル責任者」（非常勤講師のうちから専任教員が選ぶ）が指名される。このレベル責任者の業務は次の通り。

- ①チーム全体としての業務の実施に際してリーダーシップを取り、まとめ役となる。

---

9 この点について興味深いエピソードがある。非漢字圏の学生で、BクラスからC2クラスに飛び級で進んだ学生が二人いた。非漢字圏の学生としてはこのようなことは珍しいので、二人に別々にインタビューしてみた。別々に聞いたにもかかわらず、二人は総合日本語コースのいい点として、異口同音にこの点を挙げていた。相性の合わない先生がすべて担当していたらとてもやる気にならないとのこと。このインタビューは、留学生センターニュース（2009）に載っている。

10 プレイスメントテストの結果で学生のレベルを最終的に判断するわけではない。授業開始後2週間は、学生のレベルを見極める期間となっている。プレイスメントテストの結果で各クラスに配置された学生のレベルが合っていないと判断されれば、この期間中にレベル移動が行われる。最終判断をするのは受け入れ側のレベル責任者だが、レベル責任者が判断に迷った場合は、コース責任者が最終判断を下す。

②コース責任者（専任教員が務めるコース全体の統括者）への月例報告の提出。

記載項目は以下の通り：

- a. 今月の進捗； b. シラバスと現在の進捗は合っているか；
- c. 学生の理解度； d. 学生の移動； e. 欠席が目立つ学生（とその理由）
- f. 問題がある学生（とその理由）； g. 教師間で行っている活動
- h. 設備・備品に関する提言； i. その他の特記事項

月例報告提出のメリットとしては、以下のことが挙げられる。

- a. コース責任者は、各クラスの状況を具体的に把握し、問題があるときは迅速に対処することができる。
- b. 教員は自分が担当するクラスの状況をより意識的・客観的に把握するようになる。
- c. 毎月の記録を残すことにより、学生の過去の学習状況を知り、それを以後の指導のために役立てることができる。

③学期終了後の反省会用資料の作成・提出

④成績の提出

⑤クラスファイルの整理

3. 3. 3 「コース責任者」（これは専任教員が務める）の業務

①(学期始めの) オリエンテーション、プレースメントテスト<sup>11</sup>の実施

→学生のクラス分け →レベル移動に関する最終的判断

②(学期始めの) 教員の「打ち合わせ会」の開催<sup>12</sup>（授業開始約2週間前に開催）

この際の配付資料は以下の通り：

- a. 学年暦； b. 時間割； c. クラス別担当教員リスト
- d. 新規学生についての情報（「取り扱い注意！」を指示）
- e. 連絡事項<sup>13</sup>（当該学期中に留意すべき事項をまとめたもの）
  - ・前学期の反省会で検討事項となった問題への対処
  - ・学生の教育上・事務上の扱いに関する指示
  - ・主な行事日程・月例報告書の提出時期など

---

11 遅れてくる学生のための追加テストの日も決めているが、専任教員が随時行うことも多い。

12 打ち合わせ会で話し合われたことは議事録を取って記録を残し、非常勤講師室にも置いて、常時閲覧できるようにしている。

13 e.「連絡事項」も非常勤講師室にも置いて、コース開始時（1998年秋）から現在までの資料を常時閲覧できるようにしている。

### ③学期中の種々の問題への対処

④月例報告による各クラスの状況の把握及びそこで報告された問題の処理

⑤(学期末の)反省会の開催(授業終了約10日後に開催)

反省会のために、「レベル責任者」は担当クラスの「反省会資料」<sup>14</sup>(学生の履修状況、問題点、教育上の工夫などをまとめたもの)を前もって作成・提出する。コース責任者は、これらをまとめて綴じたものを当日配付し、それに基づいて各クラスの「レベル責任者」が報告を行う。

「反省会資料」作成のメリットとしては、以下のようなことが考えられる。

- a. コース責任者は、当該学期の各クラスの状況をまとめて把握することができる。
- b. 各クラスの担当教員は、自分の担当したクラスの状況を意識的・客観的に捉え直し、反省の材料とすることができる。
- c. 学生の履修状況の記録を残すことによって、それを後の指導に役立てることができる。特に「当該学期は担当しなかったが次学期以降担当する可能性のある学生についての情報が得られる」という点において有効である。

反省会で指摘された問題点は、コース責任者が検討し、次学期の打ち合わせ会において対応を指示する。

## 4. コース運営の長所・短所

まず、チームティーチングそのものの長所としてはすでに3.2で挙げられた諸点がある。これらは一人の教員でなく、複数の教員が協力してクラスを担当することで、授業の質そのものを高める効果があるということである。これは、授業が実際に行われる学期中に留まらず、クラスを準備する学期前、クラスがすべて修了した学期後も同様である。というのは、総合日本語コースでは、学期終了後に必ず反省会を行い、その学期の問題点を洗い出す作業をする。そして、そこでの議論を通じて、次学期の注意点を明確にする。このような作業を繰り返して、常に問題点を改善していく努力を払っているからである。

そして、この「複数の教員が協力をする」ということが実は、最初に述べた総合日本語コースの特徴である「様々なニーズの混在したクラス」をうまく運営していく鍵となっている。それは、複数の教員が個々の学生の状態をよく観察し、その上でそれ

---

14 反省会資料、及び反省会議事録も非常勤講師室にも置いて、常時閲覧できるようにしている。

らの情報を共有していくことが、学生のそれぞれの問題点を解決する大きな力となるからである。更に、コース責任者の持っている学生個人の情報も打合会で共有し、その学期のクラスの方針を立てるのに役立てているほか、反省会で出されるそのクラスの学生情報も、次学期のクラスの方針に役立っている。このように、多くの情報の共有と多くの教員の協働が、異なるニーズを持つ学生の混在するクラスの問題解決に役立っているのである。

さて、上のような長所もあるが、問題点もある。一番の問題は、個々の教員への業務負担が大きいという問題であろう。特に非常勤講師の業務負担が重いというのはいかなり問題と言える。大学からは所定の非常勤講師代しか払われておらず、学期中や学期前後のミーティング等への参加、諸教材の作成についてはすべてボランティア状態である（幸い、現在の非常勤講師の先生方の士気は非常に高いが、いつまでもそれに甘えていて良いわけではない）。現在の総合日本語コースの運営は、このような非常勤講師の高い意欲に支えられている面が大きいわけだが、留学生がこれからも増えていく現状を考えると、現在のように個人個人の努力に頼るような方法でなく、システムとしてうまく運営していく方策を考えなければならないように思われる。

また、このような非常勤講師への負担が高い運営方法においては、専任教員がこれをまとめていく上で、彼らとの信頼関係も非常に重要な要素になってくる。「コース責任者」が非常勤講師はじめ他の専任教員と協力・連携して各クラスの状況を把握しコースを円滑に運営するためには、上記の月例報告書や反省会資料などの活用ももちろん有効な手段ではあるが、何よりも、日常の授業運営にチームの1メンバーとして深く関わること、また、担当教員と日常的に接し、教員同士の信頼関係を保つことにより、できるだけ多くの情報を頻繁・迅速に得ること、またそれに迅速且つ適切に対処することが最も有効だと考えるが、これも言うは易く行うは難しである。

## 5. 今後の展望

上記のようなチームティーチング方式による授業は、単独で行う授業に比べ、担当教員、特に非常勤講師の業務負担がかなり重い。その上、近い将来、留学生の増員に伴って日本語クラス受講者が大幅に増加した場合（その可能性が非常に高い）、現在の負担がさらに大きくなることが予想される。このような状況下で求められるのは、「質を落とさずに現在のコース運営を効率化する方法」である。すなわち、無駄があればなくし、省力化できるところは省力化して、担当教員の負担を軽減する工夫が必要となる。「コース運営の質の維持と教員の負担軽減をどのように両立させるか」が、目下



の総合日本語コースの検討課題である。

これに対してはささやかながらも様々な工夫を学期ごとに行っている。例えば、平成21年度秋学期のDクラス、Eクラスでは、従来の口頭テスト（中間テストのみ）に新たな試みを行った。両クラスとも30人前後の登録学生を抱え、従来のように個々の学生に教員が対応していくやり方では時間が足りないため、複数の学生が一つのテーマに沿って議論を進めていくのを教師がそれを観察していくというやり方を取った。このようなやり方で、テストの時間については短縮化が達成されたが、このやり方についての議論はこれからである。さらに、教師間のミーティングについても、非常勤講師の数が更に増えてくる<sup>15</sup>ため、ミーティングを開く日程を決めることが難しくなる。そのため、今後はメールのやりとりやネットを使った会議などで様々な問題を解決するようになるかも知れない。

いずれにしても、チームティーチングの長所を生かしつつ、非常勤講師の負担を軽減する方策を私たちはこれからも求め続けていかなければならない。

#### 参考文献

金沢大学留学生センター(2003)『金沢大学留学生センター自己点検評価』

\_\_\_\_\_ (2004)『金沢大学留学生センター外部評価報告書 2004』

長野ゆり・笹原幸子・寺下優子(2003)「総合日本語コースC1(初中級)クラスの開設と活動・教材開発」  
『金沢大学留学生センター紀要』第6号, p.13-30

---

15 平成22年度春学期から留学生センターでは新しく「セメスタープログラム」を始めることになり、総合日本語コースの授業数が増えることになったため、実際に新任の非常勤講師を公募した。

# **The Japanese Education at Kanazawa University Integrated Japanese Course — The Course Management for Team-teaching —**

Masashi Mine, Yuri Nagano

## **Abstract**

One of the characteristics of Kanazawa University's Japanese program (Kanazawa University Integrated Japanese Course) is that the students learning in this program are diverse in the needs they have for learning Japanese. We believe that in teaching such mixed students, "team-teaching" is effective because a team of teachers can better find and solve their problems than teaching by one single teacher. But in order to make it work well, good communication between teachers is vital. This report presents the outline of our course management to show how our program is managed to create a good communication environment, and also points out that our program is made possible by the good efforts of the part-time teachers.